

新時代のイスラーム地域研究とその魅力

小杉 泰*

皆さま、本日はお忙しい中おいで頂き、ありがとうございます。

本日は京都大学イスラーム地域研究センター設立記念講演会ということで、お話をさせていただきます。「設立記念講演会」と銘打ちますと、麗々しく大きな催しにする場合もあると思いますが、私どものセンターは2ヶ月前に設立されたばかりで、事務局や編集制作の場所も工事中ですので、活動が実際に大きく動き出せるのは1,2ヶ月前のことかもしれません。しかし、まずは皆さまと基本的な考え方を共有したい、それが一番大事ではないかということで、今日はいろいろな方にいらしていただき、親密な雰囲気の中で、ほのぼのとした創立の集まりにさせていただきたいと思っております。

私はこのセンターのセンター長を仰せつかっております。「イスラーム地域研究」という名称は、割合良くご存知の方と、聞きなれない名前だという方がいらっしゃると思います。「地域研究」という言葉も「イスラーム」という言葉もよく知られているわけですが、それを合わせて言うと「一体何か」という面があるだろうと思いますので、それを少しお話していきたいと思います。また、レジュメの中に「4つの使命」と太字で書いてあります。使命というと大げさに響くかとも思いますが、最初の会ですので、少し大きなことも提起したいと思います。

タイトルは「新時代のイスラーム地域研究とその魅力」という題です。「新しい時代」とは何か、もちろん、私たちが生きている時代は常に新しい時代なわけですが、そのような一般論ではなく、2007年の今、21世紀に入って数年目のあたりが、地域研究にとって非常に新しい課題が出ている、重要な時期だという認識を申し上げます。

1. 新しい時代

(1) 日本における地域研究の社会的認知

最初に、「地域研究」と一般論で示しながら、いきなり「日本中東学会の設立」という、地域研究の学会としては遅めにできた学会を挙げさせていただくと面食らうかもしれません。この学会は1984年に設立されました。もっと早くから活発に活動していた地域研究は、もちろん存在します。たとえば、京都大学の東南アジア研究所は、かつて東南アジア研究センターという名称でしたが、すでに半世紀に及ぶ歴史と蓄積を持っています。関連する学会も古くからあります。ここでは、私が個人的に関わりが深いということで、中東地域研究の例を挙げさせていただきました。

1984年に中東学会ができ、私も設立発起人に加えていただきましたが、その頃は、いわゆる「中東研究」、つまり中東に関わるいろいろなディシプリンの研究、政治研究や経済研究の対象が中東である場合と、「中東地域研究」は、それほどはっきりとは分けて理解されていなかっただろうと

* 京都大学イスラーム地域研究センター長
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

思います。今でもそのような面が残っていますが、当時は「地域研究」は独自の分野であるとは、中東地域研究だけではなく、どこの地域に関してもまだ十分には認知されていなかったと思います。

私たちが現在所属している、そして新センターが附属している、アジア・アフリカ地域研究研究科が設立されたのは1998年です。その時に「継承されるディシプリンとして地域研究」が成立した、と言われました。「博士(地域研究)」という学位が初めて出るようになったわけです。

「継承されるディシプリン」とわざわざ言う意味は何かと申しますと、「地域研究」はディシプリンなのかという議論はずっとあるわけですね。政治学、経済学、あるいは理系の工学などがディシプリンである、科学であるということは誰もが認めますが、「地域研究」はそれらの科学をある地域に適用するものであって、それ自体はディシプリンではないという考え方があります。

「ディシプリン」という言葉にはいくつかの意味があります。一つは、ディシプリンは元々「鍛錬・修練」という意味ですので、師匠がいて弟子たちに知識や技を教えるという伝統的なイメージで考えることができます。まさに、それが継承されていく知識の体系がディシプリンであると言えるわけで、その内容が「科学的」かどうかという問題ではありません。それに対して、やはり科学性を備えている、結果が予知できるような科学としての方法論を備えているものが「ディシプリン」だという用語法があると思います。ふつう、ディシプリンというと後者を指しますが、少なくとも地域研究専門の大学院を作り、そこで地域研究の教育・研究をおこない、先ほど触れましたように、学位を取得すると「博士(地域研究)」と書いてある、これは継承される知の体系という意味では、まぎれもなく前者の意味のディシプリンになっています。そうであれば、やはり体系があって、それを教えるという前提が成立しなければ、このようなことはありえないわけですから、そういう意味において地域研究はディシプリンたらざるをえないということになります。このような研究科ができたからディシプリンとして地域研究が成り立ったと言うべきなのか、ディシプリンとして成り立っているから研究科ができたと言うべきなのか、どちらの面も本当はあると思いますが、いずれにしても、この意味では、ディシプリンとしての地域研究が今や存在するのだ、というべきだと思います。

また、2003年に「地域研究学会連絡協議会」ができました。私が日本中東学会の会長をやっていた時に、日本カナダ学会とアメリカ学会と語らひまして、設立にこぎつけました。今は17くらいの、いわゆるエリア・スタディーズの学会、平たく言えば、「ラテン・アメリカ」とか「スラブ」とか、「中東」や「東南アジア」「南アジア」もそうですが、どこかの地域の名前を冠した学会が集まっています。また、昨年京大に移ってきましたいわゆる「地域研」、京大では「地域研究統合情報センター」という名称ですが、まだ民博の傘の下で「地域研究企画交流センター」であった時代に、そこがイニシアティブを取って「地域研究コンソーシアム」が2004年に設立されました。これは日本にあるいろいろな研究機関やプロジェクトなどをネットワーク型で結ぶコンソーシアムです。

それから一昨年、第20期の日本学術会議に「地域研究委員会」というものが成立しました。たまたま私はその委員会の委員になりまして、今は「地域研究基盤整備分科会」の委員長を務めているものですから、来月の3月2日、ちょうど1ヶ月後に、地域研究の21世紀COEプログラムをやっているいろいろな方においでいただくシンポジウムを企画しています。日本学術会議の中に「地域研究」の委員会ができたことは、歴史的に大きな意味があるのではないかと思います。なぜかと言うと、分野別委員会というものは30ありまして、そのうち10委員会が人文・社会科学系、他は理系だと思ってよろしいと思いますが、今期の学術会議では、その10の1つに「地域研究」の名前が入りました。19期までは、「地域研究」という語は分野別委員会から2段階下がらなければ出

てこなかったのです。分野別の下の研究連絡会議の、そのさらに下の「小委員会」が「地域研究推進小委員会」という名称で、そこで初めて「地域研究」が出てくるという状態でした。ところが、今期は、政治学や法学、史学、経済学、理系の分野で言えば、基礎医学、物理学や地球惑星科学などと並ぶ水準のところに、「地域研究」ができます。

このような動きを全体として考えると、重要な学問分野として地域研究というものが存在しますということがふつうに言える状態に、ここ30年くらいの間に進んできたと思えます。これは明らかに、日本の中で地域研究が認知されてきたことを意味しています。

(2) 冷戦の終焉とアメリカの普遍主義

次は、世界的に見ますと地域研究には逆風もある、というお話です。

冷戦の終焉とアメリカの普遍主義と関わりがあります。地域研究というのは、もともと世界のいろいろな地域にいろいろな文化があることを研究しましょうということですが、冷戦は終焉した、ソ連も負けて解体してしまった、もはやアメリカ流の普遍主義ですべて良いのだということになると、細かい地域や国の違いはどうでもよくなってしまいます。冷戦が終焉して、世界的には平和な時代への期待が高まりましたが、中東では1991年に湾岸戦争が起きました。戦争を主導したブッシュ（父）政権は、当時、「新世界秩序」を構築することをめざしました。これは、冷戦が終わって、普遍主義による覇権に移行する始まりだったろうと思います。

アメリカが普遍主義で押すことのマイナス面は、今次の2003年のイラク戦争の失敗にも現れています。イラクがどのような地域なのか考えずに、軍事的に優位だから勝てるというようなことで戦争に突き進んだツケが、内戦状態となってしまった今のイラクの混乱を生んだと思います。いろいろな国があり、いろいろな地域がある、そこを良く理解しないときちんとした付き合いができません、と言う前提が崩れて、アメリカの中では地域研究に対するサポートが弱くなり、社会的にも必要性が理解されなくなっている現状があります。1990年代以降、アメリカでは、地域研究が全体として退潮しているのです。9.11事件でアラビア語やアラブ研究が息を吹き返したりしてはいますが、全体としては退潮ぎみと言わざるを得ません。

その一方で、日本は経済的に世界第2位の国になりましたから、アメリカが引っ込んでしまった分、世界的に地域研究推進の役を担わなければいけないことになりました。東南アジア研究などでは、それがはっきり出ています。中東地域研究でも日本が世界的なイニシアティブを取るべき時代が来ているのかもしれない。

(3) 世紀の変わり目

そうこうしているうちに、世紀の変わり目が来て、新世紀にはいると最初の年に9.11事件がありました。グローバル化も急速に進んでいます。その中で、地域研究の役割はいつそう重いものとなっていると思います。地域研究の出発点にはいろいろな考え方がありますが、私自身の理解しているところでは、第2次世界大戦後の世界がすべて「国民国家システム」に立脚しているという現実に対して、そのように細かく分けていたのでは分からない、もう少し大きなところに「地域」というものがある、それを学んでいくことによって、国民国家システムが生み出しているような民族紛争や国境紛争などのいろいろな問題を乗り越えていこう、つまり地域から考えることで、よりよい地球社会を作りたいということが、大きな出発点だと思います。

もう一つは、地域研究の「大志」です。これは、ambitionの訳のつもりです。ambitiousは普通は「野

心的」と訳すわけですから、Boys, be ambitious を「青年よ大志を抱け」としたのは、本当に名訳だと思います。その意味での私たちの ambition、野望とか大志があるわけですが、それは地域研究を通して、蛸壺化し、硬直化している知の体系にブレークスルーを生むのだと言ってきました。

ところが、そのようなことを一生懸命やっているうちに、世界が変わってしまいました。つまり、国民国家システムで第2次世界大戦以降ずっとやってきたが、それでは世界がちゃんといかない、だからもっと地域の事を考えましょう、と言っている間に、グローバル化でボーダーレスが進んでしまいました。ボーダーレスになれば、私たちが考えていたような、地域同士が互いに理解し合い、助け合うことでよい地球社会ができる、というのではない、別な次元で国民国家が溶けてしまうということです。そのような新しい事態に、地域研究はどう対応するのか、大変な挑戦を受けているだろうと思います。

以上に申し上げてきたことを総合すると、地域研究はこれまで順当に発展してきたとも言えますし、むしろ正念場を迎えているのだとも言えます。ASAFAS (アジア・アフリカ地域研究研究科) のような地域研究を教育している大学院で、「地域研究が正念場を迎えている」と言うと、若い方がおびえそうな気もしますが、これからも発展するのか、むしろ衰退するのか。楽観論だけではいけません。

知の体系とはどんどん組み直していくものですから、実のところ、地域研究が無くなってしまってもかまわない、と思います。無くなるということは、地域研究がもっと発展して別の名前になってもよい、ということです。知の体系が組み変わって名称が変わることは、地域研究そのものがそうやって生まれましたし、知の宿命でもあります。パラダイム転換という言葉もありますね。私自身はこの年齢ですから、死ぬまで地域研究をやっていると思いますが、今の若い方たちの場合、これから発展すれば、ご自分がやっている研究の名前をどのように付け替えたいか、考える日が来てもおかしくないと思います。うまく成功したからこそ新しいものにメタモルフォーゼする、姿を変えていくということがあります。地域研究は世界のいろいろな地域についての知識から成り立っていますから、日本でも国際化がどんどん進んで、国民は誰もが地域研究を身につけないといけない、ということでそれが「常識」化する、だからもはや、あえて地域研究と言わなくてもよい、という時代になれば、それはそれでよいのではないかと思います。しかし真面目にやっていないと衰える可能性もありますから、そこが今の正念場だと思うわけです。

2. イスラーム地域研究の流れ

(1) 最初の国際的大規模プロジェクト——「イスラームの都市性」(1987-1990)

イスラーム地域研究とは何か、ということを歴史的に振り返ってみたいと思います。イスラーム関係で一番最初の大規模プロジェクトとして、1987年からの「イスラームの都市性」プロジェクトがありました。結論として、このプロジェクトは何が良かったかと言うと、研究成果もさることながら、それ以上に中国史やヨーロッパ史の皆さんがたくさん参加して、「イスラーム史にもすごい研究がある」という認識になっていただいたことでした。それ以前は、イスラーム研究やイスラーム史は十分認知されていなかったのだと思います。

もう1つの成果は、欧米のイスラーム関係の研究者をかなりたくさん呼んだのですが、欧米の皆さん方も、来て見て、日本でもたいへんな研究をやっているという認識を持ったのでした。それまでの日本はブラックホールのようなもので、世界中から知識を取り込みますが、吸い込んだまま外に出さないのです。80年代ぐらいだと、アメリカの有名なイスラーム研究者を呼んできて講演を

していただくと、水準の低い話をなさるんですね。日本の研究水準が分かっていないので、イスラーム研究のイロハのような話をするわけです。聞いている方は、なぜ、こんな偉い先生がこんな意味のないことを話しているのだろうかと思うのですが、講演の間は、黙って聞いているわけです。質疑の時間が来ると、大学院生たちが「先生のご専門の～では、この問題はどうでしょうか？」というように、高度な質問をし始めます。そうすると、講演していた先生が勘違いに気がつくのですね、聴衆の水準を間違っていて考えていたわけですから。そういう場面がかつてはよくあったのですが、交流が深まって、それは見られなくなりました。今、日本にアメリカやヨーロッパの先生が来て、そのような事は起こりません。それは、この都市性のプロジェクトをやった結果の1つです。

(2) 第1次イスラーム地域研究

第1次「イスラーム地域研究」は、これは正式には長い題名で、創成的基盤研究による「現代イスラーム世界の動態的研究——イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」というのです。それで略称として「イスラーム地域研究」が用いられました。

「情報システムの構築と情報の蓄積」などというと大きさに響きますが、当時は平たく言うとデジタル化の推進という面を持っていました。1997年にプロジェクトを始めた時には、「皆さん、e-mailを使いましょう」と提案すると、メンバーの7割ぐらいが「e-mailって何ですか？」という状態でした。わずか10年前の話とはとても思えませんが、プロジェクトを5年間やっている間に皆がe-mailを使うようになりました。それも副産物の1つです。

このプロジェクトからは、大きな成果がいろいろ出ました。日本語でも8巻の叢書が出て、私もそのうちの1巻の共編者になっておりますし、次にお話いただく東長先生も堀川先生、赤堀先生と一緒に1巻を作られたり、皆でおおいに活動しました。ただ、その時は、京大には出番がなかったのです。ASAFASは1998年にできましたので、私も東長先生も参加は研究者個人としてで、プロジェクトが開始する時点では組織的に参加する母体がありませんでした。

(3) 京大でのイスラーム地域研究

そうこうしている間に、京大でASAFASが1998年に設立されました。私たちの講座は、「連環地域論講座」と言いまして、「連環」とは「連なる環」という、あまり日常では使わない語なのですが、要するに環が連なるよう連なる、しかし、環ですからそれ自体も1つずつ独立している。つまり、イスラーム世界論は、西アジアや中東ではそれ自体独立した環となっているけれど、同時に、東南アジアやアフリカへと連なる環になっている、というイメージです。南アジア・西アジア・中東・北アフリカ・東南アジア・サハラ以南のアフリカ、このような諸地域とイスラーム世界論や南アジア地域研究がつながっているのが、連環地域論というものです。東南アジアの諸講座、アフリカの諸講座と、ずっと連携して、イスラーム世界を研究しています。具体的には、たとえばインドネシアのイスラーム研究を、インドネシアの国立イスラーム大学ジャカルタ校、東南アジア研究所、ASAFASの3者が研究協力協定を結んでやっています。

ASAFASが始まった時に、COEプロジェクトも始まりました。今は、21世紀COEですが、その前のCOEプロジェクトです。テーマは「アジア・アフリカにおける地域編成」でした。この時に5年間でアラビア語の本を山のように買いました。その結果、現在では、京大が日本で一番たくさんアラビア語の書籍を保持しています。京大は文学部に西南アジア史の長い伝統がありますので、ペルシア語やトルコ語の原典はきちんと最初からありますので、新しくできたASAFASではアラ

ビア語に力を入れました。同時に、このプロジェクトで、南アジアに関しても日本最大級の文献コレクションを持つに至りました。東南アジアについては、東南アジア研究所での蓄積があります。ですから、伝統的な蓄積と ASAFAS の新しい活動を併せると、京大の中は地域研究の文献ならば日本でも一番手に入り易くなっています。皆さんもここを使っておられる方は便利さがお分かりでしょうし、私自身もそう実感するのですが、地域研究の本をインターネットを通じて京大内の所蔵を検索すると、10冊本が見たいと思ううちの6~7冊は学内のどこかにあります。それが、10分歩いて行けるところで、すぐに現物を手にとって見る事ができるのです。もちろん、インターネットライブラリーローンがありますから、全国からも借りにいらっしゃいますが、すぐ行ってそこで見ることができるといふ便利さは、本当にいいですね。

5年間の COE プロジェクトが終わる 2002 年に、21 世紀 COE が始まりました。「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」という、少し大げさな名称を付けてしまいましたが、臨地研究を助けるフィールドステーションをたくさん作る、ということで、中東でもカイロやアンカラと協力関係を持って臨地研究を推進してきました。

昨年は、魅力ある大学院教育イニシアティブという枠組みで、「臨地教育研究による実践的地域研究者の養成」というプログラムも始まりました。このように、イスラーム地域がその一部になっている研究プロジェクトがいろいろと実施されてきました。

(4) 第2次イスラーム地域研究

というところで、ようやく、今度スタートした第2次イスラーム地域研究の話に入ります。昨年、人間文化研究機構に「地域研究推進センター」ができました。先ほど触れました京大の「地域研究統合情報センター」が設立されたのと同時です。統合情報センターは、相関地域論や情報の共有化に重点がありますが、地域研究推進センターは特定重要地域の研究を推進するものです。具体的に名前が挙がっている重要地域は、現在のところ、イスラーム地域と現代中国です。

ちょっと数字を見ていただきたいのですが、2050年に世界の国を人口で見たらどうなるか。人口以外の要素もありますが、とりあえず分かりやすい人口数で見るとどうなるかというところ、トップがインドです。15億人ぐらいですね。次が中国。14億人ぐらい。3番目がアメリカで4億人ぐらいです。アメリカの覇権はいつ滅びるかという議論もありますが、人口数を見る限りはそう簡単に衰えなさそうです。次がパキスタン、インドネシア、ナイジェリア。この3つの国は、イスラーム世界の人口トップ3です。パキスタンが3億5千万人ぐらい、インドネシアが3億人、ナイジェリアとさらに次のバングラデシュが2億5千万人ぐらいずつ。こうして見るとよくお分かりでしょうけれど、人口数ではインド、中国、アメリカ、イスラーム世界なんです。実のところ、トップのインドの中には1割強ムスリムが含まれていますから、そこも含めて言えば非常に大きな数です。

今の数字を見ていただくと、地域研究推進センターが掲げている重点地域がイスラーム世界と現代中国であることは、数字を見ても長期的な意味のある選択のように思えます。重点地域という意味は、これからの国際関係を考える上で欠かせない地域ということだろうと思います。現代中国は来年度からですが、今年度は、イスラーム地域研究推進事業がスタートしました。今回は科研型プロジェクト（研究の助成金）ではなく、拠点を作ることに目的があります。

この点は、私たちがこれからよく考えなければならないのですが、センターとは単に研究プロジェクトの受け皿ではなく、拠点を形成していくコアということなのです。では、どのようにして拠点を作るのかと言えば、皆さまもよくご存知のように、現在の日本の行政は財政赤字を縮小すること

が基本ラインですから、やたらと新しいものを作っていくというのはしないわけですね。その中でどのようにして拠点を確保していくのかは、これから知恵を絞るべき面もありますが、まずは現在の形で5つの拠点ができました。

5つの拠点を紹介いたします。まず、早稲田大学が中心拠点。佐藤次高先生がリーダーです。第1次イスラーム地域研究も佐藤先生がリーダーをなさいました。早稲田大学はテーマが「イスラームの知と文明」。続いて、東大拠点が「イスラームの思想と政治」、上智大拠点が「イスラームの社会と文化」、東洋文庫は図書館ですから「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」をテーマとしています。

5番目の京大拠点は、半年ほど遅れてスタートとなりました。ご覧のように、知と文明、思想、政治、社会、文化、史資料といったテーマが出そろっておりますので、新しいテーマとして「イスラーム世界の国際組織」を選びました。このテーマについては、後でもう少しお話しいたします。

全体の課題は、まず、(a) 現地の研究者を含む国際的な共同研究を実施し、現代イスラーム世界について実証的な知の体系を築き、イスラーム地域研究に固有な研究手法を開発する。次に、(b) 文献資料を収集、整備し、情報検索システムを発展させ、蓄積された史資料のデータベース化、情報の公開、史資料利用の全国化・国際化をさらに促進する。3番目は、(c) 次世代のイスラーム研究を担う若手研究者を養成する、ということです。今は時代として、若手養成が重視されますが、イスラーム地域研究も例外ではありません。

研究手法として、地域間比較の手法と歴史的アプローチがあがっています。歴史的アプローチというのは現代の問題でも歴史にきちんと遡って考えるという意味です。

3. 京都大学・イスラーム地域研究センター（KIAS）の4つの使命

以上のような、全体の課題を踏まえた上で、京大拠点はどのように進むべきかということで、4つの課題と4つの使命を挙げてみます。なぜ4つかと問われそうですが、わかりやすく、ということです。たとえば7つも8つもあると、わかりにくいので、最近は大事なことは3つか、4つ挙げることにしています。

まず、第1の課題は、これまで「学の基本」を忠実に行ってきたものを、さらに発展させる。「学の基本」は大げさに響くかもしれませんが、要するに「理論・原典・臨地研究の結合」です。理屈がきちんとしていないと地域のことがうまく考えられない、何も考えずに現地に行っただけでは足りないということです。どのようにしてモノを見るのかということ、オリエンタリズムの問題もありますし、私たちがぱっと自由な目で見つつもりでも自分たちの目が色眼鏡になっている、そのようなことをきちんと理解しないといけないところがあります。地域と向き合っていくとはどのようなことなのか、理論的な問題を考えないといけないだろうと思います。続いて、やはり原典ですね。その地域で出ている書物。日記でも小説でもよいと思いますが、やはり書くという行為は大きな思索を伴ってなされているわけですから、普通の人が話していることをいろいろ聞いてその社会を理解するのも大事なのですが、それだけではなく、大きな思索の結果としてできている書かれたもの、当然研究書も含めてですが、そのような原典を相手にする。3番目は、とにかく現地に行って、臨地研究と言っていますが、フィールドワークをする。

この3つをどのようなバランスにするかという問題はありますが、いずれにしても、これら3要素を合わせる。それが第1の課題である「学の基本」です。それから第2に「地域間比較」があります。私たちの講座は南アジアと西アジア、中東・北アフリカを一緒にやっているものですから、

いつも地域間比較を実践しています。たとえば、ブータン研究でゾンカ語とかが出てくると「これは？」という気持ちになります。きつと私たちがアラビア語を使っていると他の地域をやっている人は「??」と思っているだろうと、自省したりもします。地域間比較をしていると、文化だけではなく、生態環境も違います。大きな国、小さな国、山の上・下といろいろあって面白いですね。

そして、第3の課題が「歴史の深層を踏まえた現代研究」。先ほど歴史的アプローチに触れましたが、これは歴史的アプローチとは少し違います。歴史的アプローチという場合、やはり歴史学はきちんとした学問ですので、歴史を勉強していない人が歴史をやたらに振り回すというのは生兵法ですね。現代を研究する若い皆さまが歴史も踏まえる、という場合に歴史学から勉強していくわけには、なかなかいきません。したがって、歴史をきちんと踏まえる、踏まえた上で現代を考えるとということと、歴史そのものもきちんと学ぶということは、少し違うということです。個々人の資質や関心にもよりますので、歴史学をやれとは言いませんが、歴史の深みがあることを学ぶ、南アジアでも中東でも歴史の深層があって現代が成り立っていることをきちんと理解しましょう、ということ。

最後は「先導的研究と大学院教育の連動」。先導的であっても無くても、私たちは常に研究しているわけですが、その研究と大学院の教育を連動させていきます。ASAFASは大学院ですので、当たり前と言えば当たり前ですが、研究と教育の結合を重視していきます。

新しい使命として4つ、今日はスタートなので私なりのものを挙げさせていただきたいと思えます。第1は「イスラーム地域研究の先導的研究」。これは研究をガンガンやるぞというだけの意味なら、そのようにとっていただいてもいいのですが、問題は「イスラーム地域研究」というところです。「イスラーム地域研究」なるものがあるのかという大問題があります。そこも含めて「イスラーム地域研究」という形で研究することの意味と意義をきちんと考えて、それに対して答えを早めに出していきたいと思っています。2番目は「知のインフラ整備」です。「知のインフラ」というのは、非常に幅広いと思います。たとえば本を買って図書館に入れて皆が使えるようにする、これももちろん知のインフラ整備です。ただ、研究者は普通、本を発注したりはしますが、カタログ化とかそれを書架に入れたりする仕事はしません。私が言っているインフラ整備はもう少し手間のかかる話題です。

ここ2～3年の間に刊行した中に、「アラビア語定期行物カタログ」シリーズがあります。これは各国で出されている定期行物をカタログ化したシリーズですが、シリア、レバノン、アラビア半島諸国という3冊を出しました。これは要するに、どのような定期行物、雑誌などがあるのか、いつ頃どこで出てどのような雑誌だったという、言ってしまうとそれだけの情報を集めたカタログなのですが、この単純なものを作るのが大変なのです。作るのは大変ですが、このようなものがあると、研究する時に非常に役に立ちます。また『イスラーム政治思想の遺産』というアンソロジーもあります。8世紀から20世紀までの思想家の中から厳選して、60人ほど選び、それぞれの著作の一番大事な部分を編んだものです。1000ページぐらいあり、かなり手間もかかりました。これは写本から起こしたのではなく、基本的には刊本として出版された著作から選んだのですが、刊本として印刷されているものでもこれだけ集めるのはものすごく手間がかかります。3大陸を右往左往して集めてきましたが、いったん集めると、若い人がこれから研究する時に非常に役に立ちます。

あらためて言うまでもないと思いますが、このようなものを編むとか、雑誌のカタログを作るとか、原典の翻訳をすることは、研究業績の評価としては低く扱われています。つまり、論文が一番点が高い。「翻訳をやりました」と言っても、それを論文のように扱うところはありません。とこ

ろが地域を研究している人は誰でも知っていることですが、現地の文書を読んだり、古典をきちんと読んで解き明かす、たとえば、それを日本人が普通に日本語で理解して読めるように翻訳すると、非常に手間がかかります。論文を書く方が簡単なのは当たり前でありまして、読解できないところは触れなくてもかまいません。ところが、翻訳すると、全部わからないといけません。その上で翻訳するのは、大変な研究上の力量を示すことになるのですが、今の日本の学的環境では、そのようなものを軽んじる場所があると思います。それこそ若い方が審査される時に、論文ならば点が高い、「翻訳をしました」といってもそれは他人が書いた横文字を縦にただけじゃないのか、というような評価をされます。

そこが本当は変わるべきだと思います。特に地域研究の立場から言うと、見方が違うわけです。どれだけその社会が理解できるか、その地域の歴史が理解できるかということから言えば、たとえば原典をきちんと読む仕事をやらなければいけない。また、その社会を理解する上で必須のインフラ整備をやっていかなければならない。それを若い人にやれといっているわけでは必ずしもないのですが、そのようなインフラを整備することは新しいセンターの使命なのだ、大事なことと思っただけだと声を大にして言わなければならないと思います。普通は、先導的研究で論文をどんどん作りましようと言うのですが、それにも増してインフラ整備が大事だと、今日は申し上げているわけです。

3番目は「グローバル化時代の国際的発信」。やはり国際的発信をしたいと思います。日本全体でも、いつも国際発信の重要性を言っていますが、前のイスラーム地域研究でよく分かったのは、国際的発信を少しでもするとやはり外国の皆さまが反応してくれるということです。日本の方が進んでいる研究はいくらでもあります。日本では、欧米の研究はもちろん押さえるし、現地の研究もちゃんと押さえた上で自分たちのものを付け足していますから付加価値が高いのです。ところが現状では、それを外に向かって出さない、しまい込んでいる。これはやはりできるだけ出していきたいと思います。

4番目は「新世代研究者の養成」ということです。若い人にどんどん育ててもらいたいと思っています。この4つの使命を頑張りたいというのが私の考えです。これについてご意見があればまたいろいろとご教授いただきたいと思っています。ご支援もよろしくお願い申し上げます。

4. 「イスラーム地域研究」とは何か

最後に、「イスラーム地域研究」とは何かということを一言だけ申し上げて、終わりたいと思います。

かつての議論として、「イスラーム／地域研究」なのか、「イスラーム地域／研究」なのか、という言い方がありました。「かつての」と言うのは、第1次イスラーム地域研究のことですが、その時は「現代イスラーム世界の動態的研究」というプロジェクトの略称が「イスラーム地域研究」でした。「イスラーム地域研究」があると主張したわけではないのです。にもかかわらず、略称が一人歩きして、「それは何？」ということになりまして、「イスラーム／地域研究」なのか、「イスラーム地域／研究」なのかという議論がされました。私の考えは、どちらでもない、「イスラーム地域の地域研究」というように普通は理解すべきだろうと思います。「イスラーム地域の地域研究」と言った時に「イスラーム地域地域研究」とは言わないわけですから、複合語にすれば「イスラーム地域研究」となります。このような複合語をどちらかに切って、「イスラームによって地域研究をするのか」それとも「イスラーム地域についての研究」なのか、と問う必要はありません。

1つ自明なことがあると思います。地域研究と言っている以上、ディシプリンとして地域研究でなければ困ると思うのです。たとえば経済学を当てはめた事例研究と言うだけでは、対象がイスラーム国であっても、イスラーム地域研究にはならない。やはり、「地域研究」の1つでなければならぬ、と思います。その一方でもう一つ自明なことは、地域研究にとってイスラーム地域という地域はないのです。中東とか、東南アジア、東アジア、中央アジア、中央ユーラシアとか、いろいろな地域名があります。しかし、「イスラーム地域」は、この日本でイスラーム地域研究を始めるときまで誰も言ったことがないわけですから、これまではないのです。そのような地域名はない。その点から言えば、「イスラーム地域／研究」なのかという問いもおかしな話で、イスラーム地域の研究ということは成り立たないわけです。それでは(アジア地域研究ではなく)アジア研究とか(アフリカ地域研究ではなく)アフリカ研究と言っているのと同じことです。地域研究では、そういうふうには言わなくなってきています。アフリカ地域研究、東南アジア地域研究という場合、その地域に関わる研究なら何でも「アフリカ研究」「東南アジア研究」ですよというふうにはいきません。もちろん、伝統的なアフリカ研究というものはちゃんとあって、そこでは、アフリカのある国である細菌の研究をしているのもアフリカ研究です。しかし、それはアフリカという地域を明らかにするためにやっているわけではないので、少しずれがあります。

さて、「イスラーム地域」はない、では何があるか。世界にいろいろな地域があり、中東とか東南アジアとかがあって、イスラームはそれとは次元が違う。それで私がよく言っているのは「メタ地域」としてイスラーム世界があるということです。イスラーム世界は、地域研究で言う地域ではありません。メタ地域とは、何かのアイデンティティとか理念とかいろいろな社会制度とかを基にして、くっついたり離れたりしている世界を指します。メタ地域は、「国際社会」とか「東アジア共同体」とか「ヨーロッパの共通の家」のようなもので、それはいわゆる地域よりも上の次元、メタ・レベルにあります。いくつかのメタ地域が重なり合ってもかまいません。「アジア・太平洋○○」と「東アジア○○」は互いに排除して成立する必要はない、という意味でのメタ地域です。

私はそのような意味で、イスラーム世界はあるだろうと思うのですが、そのイスラーム世界に属している様々な地域があるだろうと思います。この「様々な地域」という場合の「地域」は、地域研究の「地域」ではなく、私たちの日常語の「地域」です。たとえば、イスラーム世界に属するボルネオの何とかでも別によいのです。しかも、イスラーム世界に「属する」在り方もいろいろだろうと思います。そのような地域の総称として「イスラーム地域」と呼ぼう、と。そうすると、やはり「イスラーム世界」を媒介するのが「イスラーム地域研究」にはよいのではないか、というのが私たちの考えです。それを抜きにして、「中東」とか「東南アジア」「南アジア」と言うように、並べて「イスラーム地域」と言いましょう、イスラームに特に関係のあるところは「イスラーム地域」と呼びましようということではないのではないかと、というのが私の個人的な気持ちです。

そのような考え方もあって、「イスラーム世界の国際組織」(特に中東、南アジアを中心として)を、私たちはこれから研究していきたいと思います。なぜ、中東・南アジアかといえば、先ほどから司会をさせていただいている足立先生は南アジアのご専門です。私たちのところの特徴として、南アジアが強いという理由もあります。後でお話いただく山根先生も、南アジア、特に南アジアのイスラームそのものがご専門です。そのような背景もあるのですが、そもそも、「国際組織」というと、実際のところ、中東と南アジアがほとんどの発祥の地だと思うのです。ムスリム同胞団にしてもジャマーアテ・イスラミーにしても、タブリーギー・ジャマーアテにしても、そのような組織・運動を見ていくと、スーフィー教団は少し違うかもしれませんが、全部でないにしても組織・運動の大

半がここから生まれています。だから、中東と南アジアに焦点を当てると、ずいぶんと実態が分かるのではないかと思います。

とはいえ、人的配置に限りがありますので、全てを一度にとはいきません。先ほど言いましたように2050年になりますと、人口ではインドが1番、2つおいて4番がパキスタン、続いてインドネシア、ナイジェリア、バングラデシュです。すると、南アジアは1番、4番、7番ですからすごい地域だと思います。20位まで見ると、20位以内ということは大体1億人以上ということですが、少し下の方にエジプト、イラン、トルコ、イエメンと並びます。このあたりは中東の国々ですが、このあたりを合算すると人口はだいたいパキスタンと同じ規模です。中東の国は小さく分かれています、国境を越えても同じような人びとですので、人口的には合わせて考えることができます。そうすると、相当大きな単位となります。

今2007年にこのようにスタートして、これから30年、40年経ったところで「あのような研究を前もってきちんとしておいたために、現在(=21世紀半ば)の世界がよく分かるようになった」ということになればよいな、と願っています。

京都大学・イスラーム地域研究センターで、英語名を略して「KIAS」、発音は上智の皆さまの提案で「カイアス」ということです。上智はソフィアだからSIAS(サイアス)、早稲田はWIAS(ワイアス)、東京はTIAS(タイアス)というようになっているようですが、このカイアスを自由な知的フォーラムにしたいと思っています。これまでも、関西で「イスラーム世界研究懇話会」を続けてきましたが、それももう一度再活性化していきたいと思います。「ウェルカム」をアラビア語で言うと「アハラン・ワ・サハラン」ですが、「アハラン」は「身内として」という意味です。「サハラン」は「くつろいで」ということで、「身内としていらしてお寛ぎ下さい」という意味なのですが、このセンターはを皆さまにとってそのような場所にしたいと思うのです。

このイスラーム地域研究ネットワークの中で、関西圏の拠点はここだけなので、関西の拠点として大いに皆さまのお役に立ちたいと思います。それと同時に、開かれたフォーラムとして、関西だけに限らず、日本中から、また若い方も熟練の方もここを一つの場として、大いに使っていただけたらと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。